

“THE CITY/NOWHERE GUIDE FOR URBANISM”

副題：「都市の住人の自発的な活動を通して、都市空間やそこでの人々の行動になんらかの変化を与える」

概要

- ・このアプリケーションは、提出様式のまま、A3 の紙に出力される前提としている
- ・出力された用紙は、折り線に沿って折ることによって、ZINE の様相を呈する。
- ・このアプリケーションは持ち運ぶことができる。また、破棄することも可能である
- ・このアプリケーションは WIKITOPIA INTERNATINAL COMPETITION に際して作成されたものであるが、選考の有無にかかわらず、WEB 上にて無償で公開する。

①
これはアプリケーションである。
インストールされるハードウェアは、「都市の住人」とする。
アプリケーションとは、直訳すれば「応用」となる。すなわち、デフォルトの状態で行なっていたものを、アプリケイトすることにより、簡略化・効率化・あるいは何か別のものに転用することによってユーザーに「何らかの変化を」及ぼすもの、ということになる。
日常的な例としては、私たちはスマートフォンというハードウェアに、任意のアプリケーションを複数インストールすることにより、ハードウェアを通して、世界を「応用」している。

②
本コンペにおいて、都市におけるアプリケーションの特性として、「イントスール」のみではなく、可塑性を抽出した。つまり、アプリケーションとは、「インストールもできれば、アンインストールもできる」ものである。

③
このアプリケーションの骨子は「アーバニズム」にある。アーバニズムという単語そのものについては建築・都市計画・人文学的地理学・社会学など、様々な射程を持つ為、考察・説明はここでは省略する。
そこでまず今回は、その語源に遡ることにした。
アーバニズムとは” Urban-ism” である。”ism- 主義 -” とそこに含まれている故に、個人的なものである。しかし、Urban とは、都市であるがゆえに、個人的なものではない。つまり、アーバニズムとは、都市について、あるいは都市において、それを思考し、経験する精神的な態度にほかならない。

④
では、「アプリケーションとしてのアーバニズム」とは如何なる形を持って現れてくるのであろうか。
まず、本コンペティションの要項に沿って、対象区域とされている銀座から考えていきたい。銀座を” 訪れる” 際、我々は銀座の住人ではない。更には言えば、ドーバーストリートマーケットの隣にユニクロがあるように、我々は銀座を消費する。「買い物」というアプリケーションを持って銀座を遊歩する際に、それは「住まう」ことから遠く隔たれた都市経験の用法であり、彼 / 彼女らは「ユーザー」として、より優れた都市経験をするために「課金」を行う。あるいは行わない。課金する / しないという判断はユーザーに委ねられており、そしてまたそこには、『課金』を行えばよりよい経験が得られる」という、「買い物」のアプリケーションを通じて銀座という都市を使う論理が通底していることは留意すべき点である。

⑤
しかし、「買い物というアプリケーションのユーザー」が「住人」ではない、と結論するのもしささか排他的にすぎるものである。なぜならば、彼らは銀座を舞台として、課金をすることにより、銀座を applicate- 応用 - している存在でもあるからだ。その応用している瞬間において、彼らは住人「としても」銀座を経験している。
故に、本コンペティションは彼らの都市経験というハードウェアの中に、“ism” としてアプリケーションを提案するものである。すなわち、都市 - 身体 - 経験という分かちがたく結びつき、そして連関している現象の中に、選択肢として、「アーバニズム」を、可塑性を持ったものとして提案する。

⑥
アーバニズム、それは都市に対する主義である。思想である。無論、この文章を書いている私も都市に対して主張を持つ存在の一人である。私は銀座のユーザーでも無ければ住民でもないが、そうなる可能性もまた存在している。ここで今一度、④に立ち戻ることができる。つまり、私 - 彼 / 彼女らにとって、「銀座」は「渋谷」「新宿」「マンハッタン」「デトロイト」「サンパウロ」…ともなりうるのである。
「住民」とは、そこに居住しているがゆえにそのように呼ばれるわけではない。場所を経験している主体を、主体以外から観測した際に、私 - 彼 / 彼女らはその都市において「住民」となる。経験には、様々な視座が必要とされる。

⑦
「都市の住人の自発的な活動を通して、都市空間やそこでの人々の行動になんらかの変化を与える」。変化とは、「進化」ではない。「増殖」でも、「豊かになること」でもない。ただ、変化する。⑥で示したように、本「アプリケーションとしてのアーバニズム」は、筆者本人の” Urban-ism” である。それをインストールし、住人は自発的に、自分に内在する思想を、都市を持ってして発露し、行動することを期待する。あるいは、期待しない。なぜならこれはアプリケーションである。住人が不要だと考えた時、このアプリケーションはアンインストールされる。ism の必要のない空間、それもまたひとつの、都市を都市たらしめている魅力のひとつであろう。

重要なのは、アーバニズムが「ある」ということをこの場で提示することである。都市のアプリケーションはひとつではない。私はそのうちの一つを、「私のアーバニズム」としてここで提示するにすぎない。



THE CITY
/NOWHERE

A GUIDE FOR URBANISM

私はそこに降り立つ。家を出て、ここに立っている。
部屋から、ここまで、ドアを開けてから 30 分。30 分前、
私は家にいた。
あなたは立つ。あなたはいま、これを読んでいる地点に立っ
ている。家から出て、あるいは家の中で、これを読んでいる。

都市を目指す。目指す？ 30 分の間に私は都市に入った。あ
なたは？ 入っている。入ろうとしている。
都市に入る？ 何をまたいで都市に入ったのだろう、30 分
の間に、「ここから都市です」と書かれた標識をあなたは見た
だろうか？ 少なくとも私はみていない。しかし立っている。
都市に。都市と言われる場所に入っている。気づいたら、
私は、都市だった。

広告の光線、行き交う人、人たちの匂い、視線が交錯する。
地面からビルまで跳ね返って、人に当たる音。全てが、マー
ブル模様のように混ざり合っている。
ここを都市だと私に感じさせる。そのうちのひとつにあな
たがいる。あなたは何をしているのだろう。そして、あな

たにとって、私はあなただ。都市のひとつ。私は、あなたの、
都市のひとつとなっている。隠れてもいない。目立っても
いない。ただ、あなたに都市を感じさせるものとして、私
はいる。私もあなたを感じない。しかしあなたは都市にいる。
お互いに、アーバン・スケープとなっている。

さっきまで私は立っていた。まだ30分前のまま。都市に入っ
て、降り立ったままの姿。アーバン・スケープに包まれて
いるまま。
歩こうと思う。イヤホンを耳にねじ込む。ジミ・ヘンドリ
クスのウッドストックのライブ音源を流す。ジミヘンの、
歌詞の無いギターが、The Star Spangled Banner を歌う。
1969 年に鳴らされた音が、いま、この、私の鼓膜を震わ
せて、脳に入ってくる。
しかしここはウッドストックではない。都市だ。そして
1969 年ではない。かつて 1969 年だった地点だ。
アーバン・スケープから音が消える。歪んだストラトキャ
スターの音が私と都市を分断する。

歩行を開始する。スニーカーの靴底が、都市を踏む。あな
たはまだ立っているか。だとしたら、歩け。都市を歩け。
私が踏んでいる都市の大地は、誰かが踏んだ都市の大地だ。
数メートルも掘れば地下には都市が広がる。大地の上にま
た新しい表面を作り、その表面は何層にも積み重なり、つ
いには 200 メートルを超えた高さへと成長しつつあるメト
ロポリスのビルたち。

しかしそれらは歩行には関係ない。あなたは迷い始めた頃
だろうか。その感覚はおそらく正しい。迷うのが嫌ならば、
都市を拒絶すればいい。私は、都市のゼロ・ポイントを踏
み続ける。地表のゼロ・ポイント。1969 年にも、その前
にも、そしていま、これからも存在した / する、都市のゼロ・
ポイントを歩行する。迷う。アーバン・スケープに溶け込
みながら、都市を迷う。
目的地は無い。なにかが起こるかもしれない。交錯する視
線のうちの 1 つが私に強くぶつかるかもしれない。目指す
べきところはない。漂流する。自分の歩行が、都市が、私
をどこへ連れて行くのかはわからない。

都市において、私は自由である。歩き出すと、私は都市の
波に従いながらも、抗うことができる。見えない道が、角
を曲がれば曲がるほど生まれてくる。ゼロ・ポイントをた
かだか数百メートル上に押し上げた「地表」から都市を見
たとしても、この生々しさは感じられない。自由は感じら
れない。私は都市において、迷う、見えないものを見よう
とし続ける点において、自由である。

あなたはどうか。今、すれ違ったのはあなただろうか。
スターボックスのテラス席から私を見ているのか。既に、
都市になった私をあなたは見ているのか。さっきから感じ
る視線は、既に都市になったあなたのものなのだろうか。
ガードレールにボムされたタグはあなたの名前なのだろう
か。駐車場の縁石、スケートボードがノーズ・スライドを
した後に残るワックスの跡は、あなたがつけたのだろうか。
あるいは、あなたは私を動かしているのだろうか。都市に
おいて、歩行するという点において。

都市が、私の身体と空間を溶かしては接合する。
私が踏んだ大地はすぐさま再び誰かに踏まれる。それがずっ
と続いている。インターロッキングだろうが、アスファフ
トだろうが、焼け跡だろうが、私が今立っているところは
既に誰かに踏まれ、そしてこれからも踏まれ続ける。
あなたはそれを聞いて、途方も無いと思っただろうか。そ
うだ、都市は途方も無い。都市は、人間の、国家の、歴史の、
政治のスケールを超えて存在している。

私たちはいま、そこに名前をつけ、イメージを与えて、そ
のイメージの中に入って戯れているだけに過ぎないのかも
しれない。
しかし、いま、私は、あなたは、都市を歩いている。都市が、
都市であったということは消えない。私たちに歩かれたと
いう事実は消えない。それは都市と、私たちの身体だけが
知っている。アーバン・スケープはゼロ・ポイントの都市
の大地に吸い込まれ続け、そこを歩く人を動かす。あるいは、
遠ざける。

疲れた。

帰る。
「帰り道」をみつけるのは簡単だ。地図をなぞるのではな
い。脚が知っている。あるいは、都市が教えてくれる。
今は都市から出る。再び都市へと入る準備をするために。
これは終わりではない。都市のすべての始まりである。
都市はどこにもない、あなたがいるところが都市である。
あなたが行くところが都市である。私は都市だ。あなたは、
どうだろうか。